

平成 26 年度 第 2 回 静岡県中央新幹線環境保全連絡会議（第 2 部）

日 時	平成 26 年 7 月 29 日（火） 午後 0 時 30 分から 1 時 30 分まで
場 所	榎島ロッヂ研修室
出席者 職・氏名	(委 員) 和田会長、北田部会長、山田委員、森竹委員、入谷委員、福田部会長、 亀岡委員、油井委員、松本委員 (関係機関・事務局) 東海旅客鉄道株式会社 田中所長、中村主席 特種東海製紙株式会社 鈴木リーダー 国土交通省 中部地方整備局 筒井課長、静岡河川事務所 川上課長 環境省 関東地方環境事務所 中川環境影響調査員、中村自然保護官 静岡市環境局環境創造部環境総務課 大村課長補佐 静岡県くらし・環境部 池谷部長、秋山環境局長、平野自然保護課長 市川生活環境課長、森谷水利用課長 他
議 題	南アルプス現地調査
配布書類	別添資料のとおり

(司会)

ただ今から、第 2 回静岡県中央新幹線環境保全連絡会議（第 2 部）を開催いたします。

なお、本日の会議終了後、報道機関による委員および J R 東海の皆さまへの取材時間を設けております。取材時間は、会議終了後、15 分程度とさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、次第 2 に入ります。

ここからの進行を、和田会長、よろしくお願いいたします。

(和田会長)

皆さん、天気もよろしいものですから非常に暑い陽気になりまして、長い間、ご苦労さまでございました。

2 日間、見ていただいて、主なズリを保管する場所がどういうところであるのか。

それから、何十年、30 年、40 年と経ちますと、あれだけの回復力というのは確かにあることは、我々もよく分かりましたけれども、現場で、どういう形で自然が回復してくるのかという事は、実際には、なかなか、我々、フォローできてないというのが現実だと思います。行ってみたらこうなるといって、そういう形ですので、そういう所が、今回、私たちも見ながら、どういうふうに工事が始まったり何かしてきた場合に、そういうイメージをどういうふうに持っていくのかということ、やはり、皆さん、いろいろと経験が、こういう工事に対しての経験というのが、あんまり、我々、無い。ありませんので、そのところを、できるだけ、想像力を、できるだけ上げて、そして、どういう影響があるのか。それから、それを収めるにはどうしたらいいのか、

避けるのにはどうしたらいいのかというアイデアを、これからもずっと出し続けていただければと思います。

今日は、一応、これで、終わりになりますので、それぞれの皆さん、順番に、ご感想、あるいは、いろいろ気になったところとか、その辺についてのご意見をいただければと思いますので、よろしいでしょうか。

(北田委員)

はい。北田です。

実は、私、ここに連れて来ていただくのは初めてでして、天気が良くて、私にとっては非常にいい経験。ただ、道無き道をとというと、ちょっと、大げさなんだけど、やっぱり、現場の付近というのは、非常に大変な場所だなと。工事をやるにしても大変な場所だなという印象を持ちました。

トンネル掘りというのが主たる仕事だと思うんですけども、そこで出てくる土を、やはり、どこかに置かなきゃいけないと。場所が場所だけに、あまり遠い所に持ってくるのは、もちろん、現実的ではないと。従って、昨日と今日、見せていただいたような場所にせざるを得ないのだというふうには思います。

ただ、場所が南アルプスエコパークの中ということで、かつ、置くにしても、やはり、川を守り、山を守り、ということ、最大限にしつつやらなければいけないということで、非常に大変な工事になるのではないのかなというのが私の印象です。

私はあまり専門ではないですけど、他の専門の委員の方々と十分に協議されて、これから、いかれるといいのではないかというふうに思いました。

以上です。

(山田委員)

山田でございます。

昨日、今日と、発生土置場をかすめたり、あるいは、実際に降りて見せていただきました。その時、やはり、思いましたのは、発生土というものが、どういうものが出てくるのかと。深い所から掘り出すわけですね。今日、見たような瓦礫ではないということが、当然、想像されますので、それに伴う細かい土砂のようなものが、どういう状態が出てきて、当然、並べておけば乾燥しますよね。そうしたものが、雨が降った時に周囲の沢に流れ込んだ時に、どんな影響が出るのか、今のところは、全然、分からないと。

また、分量の配分も分かって、決めておいでにならないわけですから、その結果の影響というのは非常に図りにくいものがあるなと思っております。

(森山委員)

漁協の森山でございます。

まず、2つほど、お願い、質問したいんですけども。

発生土置場の扇沢、朝いち、目指してもらったわけですがけれども、わざと、高い方に追っかけて工事用トンネル開けて、すり鉢状の山に置くような工法だと思うんですけども、どの位の土量を置くのか。すり鉢状の山で、一番、土石流が発生しやすいような場所ではないかなというふうに見ました。

あとは、河川流量の予測結果ですけども、現況に比べて、完成後には元には戻らない数字が出てきますけども、ここら辺はどのように対応していくのかな。事業の後に通常に戻していただきたいと思います。

あくまでも、予測結果ですので、実際は、減るのかというのが。今の施工法というか、技術ならば、山梨、長野へ水を落とさなくても、排水ボーリングで、十分なんとなかるとは思うんですけども。横穴で、後は、前後に落とす場所が無くても、下の方に流すことは可能だと思うんです。

ポンプアップも、多分、無理だと思う。そのような工法を採る、考えていただければありがたいなど。

(和田会長)

そういうご質問と、それに対し、多少でもいただければと思いますが。

(JR東海)

評価書を出して、今、補正をしているので、今までご説明させていただいた内容とさして変わらないんですけども、扇沢を選んだのは、確かに標高は高いんですけども、先ほど、現地でもお話させていただきましたように、できるだけ、既に1度、工事とかで使った場所。あるいは、工事は使っていないんですけども、1度、既に伐採をして人工林になったような所。そういった、あと、地形的な条件がありますので、周り。例えば、扇沢のような窪地のような状態になった所。そういった所、そういったもろもろの観点で、選んだ候補値が、扇沢を含む7カ所ということです。それで、あとは、今、さらに、環境のことを、確認調査もしておりますし、今、測量設計して、今後、関係法令に基づく行政との打ち合わせが出てきますので、そういったことによって、ベストな、どこにどれだけ置くかをこれから決めていきます。

あと、河川流量の減るという話は、今、出た数字は、もう、出た数字が決まったものではなくて、まずは、そもそも、トンネルを掘っただけの厳しい条件をベースにして予測をしています。だから、影響が大きめに出ている可能性があります。いい換えますと、いろいろ、環境保全措置を、さらにやって検討してまいりますので、ちょっと、今日、詳細は、今まで、いろいろ、審査会で説明させていただきましたので、保全措置の説明は省かせていただきますけど、そういったものをして、まず、容易に水が減らないように、水の減る量を小さくするような努力を、まず、していきます。

かつ、やはり、その予測に不確実性があるものですから、当然、今、事後調査をして、その事後調査を踏まえて、さらに環境保全措置の見直しだとかをやっていくと。その事後調査につきましても、今、知事意見もありました。今、環境アセスの評価書

は、まだ、やってるというプロセスなんですけども、その後の環境影響評価の制度上のプロセスとして、静岡県には事後調査計画書を提出しなさいというのがありますので、そういった手続きの中で、しっかり事後調査の方法についても明らかにしていって、皆さんに、いろいろ、ご意見を聞きながら決めていきたいと。

かつ、その事後調査の結果につきましては、公表することを考えておりますので、それを皆さんに見ていただいて、その適否というんですか。いろいろ、ご意見をいただいて、また、環境保全措置をまず見直していくといったことを考えてます。

その中で、私どもも以前から申し上げてるのは、ポンプアップするのも1つの方法であるというのは、当然、トンネルが山梨県と神奈川県側につながるまでは、これは、ツッコミ斜坑、ツッコミ施工というんですけども、下向きに掘っていくトンネルなんで、必ずポンプで水を排出しないと工事ができないトンネルになってますので、当然、最初、隣の県と繋がるのに6~7年、今、かかると想定してますので、その間を必ずポンプで大井川の方へ水を戻すことになります。だから、物理的にはできることを、今、ですが、最終的に、保全措置として、そういう戻すということを、繋がった後についても考え、1つの方向として、選択肢としても持っているということです。

今のところ、ボーリング、横坑を抜くという、ちょっと、そういう発想は今のところ無いんですけれども、自然流下できれば、確かにポンプでやるよりも、電気も要らないとか、メリットもありますでしょうから、そういったご意見は、また、ご意見として、今後、聞いて、環境保全措置を検討する段階では参考にさせていただこうかなと思います。

(入谷委員)

山岳会の入谷と申します。

今日は、地元の私でも、初めて上の伝付越えの向こうのところへ連れて行ってもらったわけなんですけど、トンネル工事で、あそこへ残土を置くということは、そうでなくても、この山の崩壊は、今、いたって目立って大きくなっているのが、我々、全面的に分かってきておるんですけど、ましてや、自然の山林へ、残土を、あのお山へ上げるということは、やはり、今後、あれが下へ流れ出るという恐れもあるのではないかと、そんな懸念もいたすわけです。

また、残土置場が7カ所、8カ所あるんですけど、その捨てる所のが、おそらく高さが10メートル以上の盛土になってくると思います。その床止めなんかはどのようにお考えでしょうか。

今の法面高さで。

(和田会長)

もし、お分かりになっているようでしたら。

(JR東海)

今、まだ、先ほどから申し上げさせていただいてるように、測量して設計をしている段階なので、こう決まったってものはないんですけども、基本的な方針としては、やっぱり、安定する勾配とか、あるいは、そういった必要に応じては、土留め擁壁ですね。ただ、設計の基準というのがありますので、そういったものに則って、崩れないような安定した勾配を、もっと設計計算をやりながら決めていく。

場合によっては、必要に応じて、端部には、例えば、燕沢のような、すぐ横に川があるような所、ああいった所は、擁壁、コンクリート構造物になるのか、擁壁構造を、そういったものを設置しなければいけないと思っておりますけど、いずれにしろ、そういった基準に基づいた安全性とか、そういったのを十分配慮して設計して決めていくということです。

(入谷委員)

ありがとうございます。

本当に、ちょうど、1割以上の勾配で、おそらく、盛土すると思うんですけど、床止めを、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(和田会長)

はい。どうもありがとうございました。

それでは。

(福田委員)

福田です。

昨日、今日、2日間、この現地見学会を企画していただいた県庁の皆さん、それから、現地での現場説明をしていただいたJR東海の皆さんに、まず、感謝申し上げます。

私も初めて現場を見させていただきました。やはり、あれを見て驚くことができました。それは、山が非常に荒れてるといひますか、崩壊地が多いというのが1つです。

それから、流れている上流の水が非常に綺麗だったというのが印象。あれが畑薙、井川へ行くと、下流へ行くと白濁した水になるというのも、これ、また、自然の摂理とはいひえ、悲しいことだなという感じがしました。

私自身、技術者ですけども、東海フォレストさん、田中所長さん以下に、やはり、技術者というのひ、いろいろな事象を工学的、技術的に解決できるという頭が9割以上ある。これは技術屋の宿命です。しかし、自然生態とか、今日のいろいろな疑念というのひ、必ずしも、工学的・技術的に解決しきれない課題がたくさんあると思ひます。

だから、先ほど、山岳会の言葉でいひば、安心できるという、そういう、人になるほどという、そういう説明の仕方が必要だし、安心感を持たれるような施設設計に心がける。力学的にこれは持つんだだけでは、やはり、説得力がないんで、地域の人が

心配しておられる事を、虚心坦懐に傾けて、施設設計とか施工計画に反映して欲しいというふうに思います。

それから、水資源を見ますと、シミュレーションとはいえ、2 トンの水というのは、相当、大きい。繰り返し、私は、1 回目からいっておりますけども、無視できない。無視というか、相当、大変な水です。これはシミュレーションはシミュレーションで、要は、事後どういうことをやるかについて、やはり、科学的な議論。根拠に基づいた議論しないといかんと。そういう意味でモニタリングをしっかりして欲しいと。それは、何も工事が終わってからではなくて、県に出される事後調査計画書、そちらも、やはり、着手前、工事中、それから、完成後ということでやらないとモニタリングの意味が無いものですから、そういうデータをきっちり積み重ねて、問題が出てきた時の議論が科学的に行われるような配慮、そういうような心がけが大切だと思うんです。

準備書の作成中で、なかなか、所長さんがいえないことが多いと思う。しばらく、経ったら出てくるんで、それを楽しみにしておりますけれども、そういう配慮を。それが問題解決の、1 番、早いやり方だろうと思いますので、しっかり、保全会議でこういう議論があったということはお伝えいただきたいと思います。

以上です。

(和田会長)

はい。ありがとうございました。

(亀岡委員)

亀岡ですけども、幾つか判からないことがあるんですけども。

まず、土砂運搬のためにベルコン用のトンネル掘りますよという、そのトンネルを掘る時の土砂はどこに持っていくんですか。

細かい事はいいんですけども、それが、まず、よく分からない。とにかく、一番、最初に着手しないとズリが出せなくなるので、それを、一番手にやると思うんです。

それから、もう 1 つ。そのトンネルを作るということは、それを作するために時間もかかるし、あそこにどれだけの土砂を入れるかといって設備も作るので、かなり早い段階に、明らかになると思うんです。

とにかく、山の上へ持っていくのが、どれ位の土量を、こういう設備を使って運びますよというのが、先に出てくるんで、その前に、先ほどいいましたトンネルを、運搬用のトンネルを掘る時の土砂をどこに仮置きするのか。それとも、他の予定地に持っていくのかという、その辺のスケジュールが、大体、もう、頭の中に浮かんでるはずなので、分かり次第、教えていただきたいということです。

それから、もう 1 つは、この水。トンネル掘って、一番問題は、地下水が下がるということなんです。地下水とか流量を、この資料を見ると、約 1 年前から、工事着手の 1 年位前からやりますよということが、降水期、渇水期は分かるにしても、その年が豊水年であるか、渇水年であるか。つまり、渇水年で渇水期に、普通に考えれば、

一番、水位下がるんで、それが自然状態でどこまで下がってきてるのかというのを把握されておかないと、後々、もともと、この時期ならこの辺まであったはずが、ここまで下がりますよというようなことの裏付けにならないと思うんで、工事1年前というのではなくて、できるだけ、他の期間のデータであれば、もうちょっと長い年月が計測されてるのもあるかもしれませんので、それを含めて、事前の調査というのは、もう少し長いスパンでやられた方が、逆にいうと、JR東海さんのためにもなると思うんです。

意見というか、感想というか。ということですよ。

(和田会長)

はい。ありがとうございました。

今の事に関しましては、何か付け加えることはあれば。

(JR東海)

まず、ご指摘のように、トンネルが、メインは、他に比べて小さいんですけども、ベルトコンベアーを通すトンネルも、当然、トンネルなので土砂が出ます。仮に、扇沢の発生土置場も、やっぱり、これだけ置きますと決まった時に、やっぱり、最初は、後で見ました燕沢とか、あるいは、もう少し下流の所に先に置かせていただいて、その間に、扇沢に向けてのベルトコンベアートンネルを掘って、そこはうまく工程が流れるように、マニュアルに、下の方がいっぱいになれば、我々の設計上、いっぱいになれば上に持っていくような、そんな工程を引きたいなと思ってます。

ただ、どこ、どれだけ入れるかを、今、決めきれていないんで、それにもよるんですけども。内容的にいうと、そういったことになります。

あと、水資源の事後調査、モニタリング、1年前から。これ、ちょっと、割と各都県、統一して、単純な書き方してあるんですけども、現地的には、もう、実は、継続的に、平成18年位から、我々、この地区の河川流量の調査をやってきております。

かつ、今年の、今シーズンというんですか。今年、ゴールデンウィーク位から、この地区というのは現地に入れますので、その5月以降、毎月、今、事後調査の地点の、既に、調査を、事後調査にあたる流量期観測を、今、既に始めております。

必ずしも、1年にこだわっているわけではなくて、もちろん、本当にいつ着手できるかだっけよく分からないので、やっぱり、できるだけ早くという発想がありますので、もう、既に始めておりますし、今、亀岡委員、ご指摘のように、他の所から得られるデータにつきましては、実は、今回、シミュレーションに使ったものも、過去10年のデータを貰ってやっていますので、そういったものも、今、知事意見の事業者見解のところに書かせていただきましたけれども、やっぱり、そういったデータを、いろんな電力会社さんとか、国土交通省さん、行政さんとか、いろいろ、お持ちなので、それを、是非、いただけるように、今後、ちょっと、調整して、それであれば、もう10年前とかから比較ができますので、そういったことを、今、検討してやって

おります。

それも事後調査計画書を出す時には、そういったこと、大体、概ねまとめてお示ししたいなというふうに思っています。

(和田会長)

はい。ありがとうございました。

よろしいでしょうか。

(油井委員)

油井でございます。

私の方は、感想ということでお話させてもらいたいと思いますけども。

実は、今朝、朝早く起きまして、昨日、帰りに見た田代ダムの辺で、ダムの方へ流れる水が、だいぶ、あったものですから、もう少し見てみたいなと思って見てみました。そして、水利用の標識を見てみましたら、この時期、4.99 トン取っているんです。大体、5 トン位、水を取っているんだなというイメージで、本川を見てみますと、本線は9 トンから8 トンかなというイメージが、得られました。

そうしますと、その中から、5 トン、もし、田代の方へ行っているという前提としますと、大体、4 トンから3 トンの量が本川に流れており、概ね2 トンが減水という話になりますと、かなり2 トンは大きな水だなという、そういう再認識をさせてもらった次第でございます。

ということで、2 トンの水というのは、我々にとって、大きいという認識を、この現地調査で新たに量として感じさせてもらいましたものですから、是非、水は戻すという対策を確実にやっていただきたいなと、こういう印象を受けました。

それと、あと、残土でございます。残土置場につきまして、私、一番懸念していたのは、発生土が下流に流れ出て、ダム容量等を、だんだん、だんだん狭くするのではないかなと。こんなふうに感じたんですけども、今日、上の3 つにつきまして、だいぶ、ある意味でいうと、キチッと処理できる位置にあったのかなという印象を受けたんですけども、ただ、昨日、来た時に見た下流につきましては、何か川の横にちょこっと置く、ちょこっとということはないんでしょうけども、置くようなイメージを写真からは見られるものですから、是非、そこも、キチッと流れ出ない対策をやっていただきたいなと、こんなふうに思いました。

以上でございます。

(和田会長)

はい。ありがとうございました。

(松本委員)

松本と申します。よろしく申し上げます。



私は、実際に現地踏査をやらさせていただいて、リニア事業の大きさというんですか。ものすごい事業やるんだなというのを、一番、初めに感じました。

その中で、私どもが、一番、JRさんに、前々からいつてきている事は、大井川の河川流量が2トン減るよという問題と、あと、水質悪化への問題です。そういったことについて、JRさんの方に私どもは、意見を出させていただいて、大井川で無くなった水は、また、大井川に戻して貰いたいというような事で、JRさんの方をお願いしてきました。

そういった中で、前回も、お話をさせていただいたんですけども、ポンプで汲み上げて、また、大井川の方に戻すということが、JRさんの方から示されています。その方法については、具体的には、なかなか、難しくなるだろうと。地下400メートル位の所から地上まで持ってくるとなると、なかなか、大変だろうというお話を聞いています。また、それについては、また、具体的なものについてお示しをしていただきたいと思っています。

いずれにしても、具体的な調査方法なり何なりが、まだ、ちょっと、具体的にJRさんの方から示されておりませんので、そういった事も含めまして、是非、JRさんには今後も情報提供を、是非、やっていただきたいと思っています。

以上でございます。

(和田会長)

はい。どうもありがとうございました。

今話を、よくお聞きいただいて、お願いしたいと思います。

(JR東海)

分かりました。

今、まさに、環境影響評価のプロセスの真っ最中なんですけれども、多分、この環境保全連絡会議というのは、それが終わった後、それを情報交換をしてやっていく場だというふうにお聞きしています。我々は、もとより、我々は、もともと、こういった事業調査の結果とかというのは公表するという事を以前から申し上げさせていただいておまして、当然、環境保全連絡会議の方でもデータをお示しするのは、ご依頼があればお示しするのは当然だと思っています。

あるいは、知事意見の中に、現地、環境保全連絡会議で現地を見る場合があるというお話もありました。そちらについても、そういったご依頼があれば、もちろん、工事をやってるので、今、安全上のことだとか、現場管理上、いろいろ、日程調整だとか、そういったことは出てくるかもしれませんが、そういったところがクリアされれば、そういったことにもご協力していきたいと思っています。

そういった形で情報提供については、やっていくつもりですので、そこはご理解いただければいいかと思っています。

(和田会長)

はい。ありがとうございました。

一応、今、会議の方の委員の方には、これで。いかがでしょうか。

今日は、国交省の方とか、それから、環境省の方もおみえですので、今回の見学、あるいは、今後の方針につきまして、ご感想がお願いできるかと思っておりますので、よろしく願  
いします。

(国土交通省)

国土交通省の中部地方整備局です。

大井川は国土交通省で管理している1級河川であり、現場の方は静岡河川事務所が担当しています。そのため河川を管理する立場ということで、オブザーバーとして参加させていただいております。

やはり、河川水が減少するという影響については、我々としても、非常に多くの地域の方が、大変、心配になっておられるということは、十分承知しているというところでございます。

私どもとしても、やはり、先般の大臣意見にあるように、精度の高い予測やモニタリングが非常に重要と考えており、しっかりとした精度の高い、信頼のできるデータを採ることが必要で、そういった面で、私どもの持っている技術的なノウハウを、こういう検討の場に、いろいろ、提供していきたいと思っております。

また、大井川下流での流量観測及び雨量データなど、既往の水文観測データは蓄積したものがありますので、そういったものも活用しながら、こういったモニタリングの方に、先ほど、福田委員がありましように、より信頼できる、そういった検討ができるように、我々の方も協力していきたいなというふうに思っております。

以上です。

(和田会長)

どうもありがとうございました。

それでは、環境省、お願いします。

(環境省)

環境省関東地方環境事務所でございます。

本日はどうもありがとうございました。

当省でも、先だって、大臣意見を出ささせていただきましたように、環境保全の見地から、できる限り、地元住民の皆さんや、関係する各行政機関、その他事業者と密接な連携と情報提供に努めていただきたいと思いますと思っております。

また、再三、いわれておりますが、当省としては、水生生物や河畔林等の自然環境

保全にも、是非とも留意していただき、事業を進めていただければと思います。

(和田会長)

はい。ありがとうございました。

静岡市はよろしいですか。何か、もし、あれば。

(静岡市)

静岡市環境総務課、大村と申します。

2日間にわたり、どうもありがとうございました。

私ども、静岡市としても、この中央新幹線に関する意見につきましては、県知事意見ですとか、関係大臣意見、そして、国土交通大臣意見に、私どもの意見を反映していただいているというふうに考えております。

そういう中で、今、JR東海さんが、評価書の補正をしているということですので、そういったことを踏まえて、補正がされることを、大変、期待したいと思っております。

今、皆さんからお話があったとおり、今後、具体化していく中で、いろんな情報は、やはり、当然、地権者であります特種東海製紙さんのみならず、地元の方にも、やっぱり、適切に情報提供をしていただきたいと思います。

あと、細かい点につきましては、静岡市の担当部署との協議等があると思っておりますので、その中で、私どももしっかりと話をしていきたいと思っております。ありがとうございました。

(和田会長)

はい。どうもありがとうございました。

それでは、一応、これで、各委員と各部署の方々の話をお聞きしましたけれども、もう少し、お話をされる方がいらっしゃれば手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。

今回、見て、何人かの方がいわれておりますが、やはり、水の問題というのは、非常に大きい問題でありますし、それから、残土の置場です。それから、その残土の置場から流れ出る水がどういうものが出るのか。これも、非常に不明なところがあります。私は、地面の下の岩石の性質を調べるのが専門ではありますが、ああいう所で出てきたものが、やはり、酸素にさらされるという事は、その中に入っている、地下の深い所で安定している鉱物が、それが酸化状態になる。それによって、最初の表面に出てきたばかりの時の反応というのは非常に早いものですから、それが、だんだん、だんだん、ゆっくりになってくるわけです。現在のレキのような物は、こすれて、少しずつ、減ってくと。こういう状態なんです。

一番最初の時には、かなりの酸素の影響というのは出るとは思いますし、それから、それが粉末状態になれば表面積がすごく大きくなるわけですので、その時の影響とい

うのは非常に危惧されているとこだと思います。それは、水の管理上にもかなり影響があるのではないかという感じがしておりますので。

残土に関しましても、残土は他の地域ですと、いろんな別の使い方が考えられているんですけども、静岡県の場合は、再利用することができないんです。ですから、それが、そのまま、廃棄物として保存しなければならないという、その辺についても、皆さんも、だいぶ心配になってると思いますので、そのところを、できるだけ、どういう形で保存するかということにつきましては、知恵を出していただければと思うんです。

今のところ、私たちも、それほど、アイデアがあるわけではないんですけども、大体、最初の時の粒子が細かくなればなるほど、表面積が大きくなりますので、そのところは、大きな石はゆっくりするわけですが、それが、短時間に、細かい発破した後のものというのは、かなりの反応するのではないかという、そういう懸念はありますので、そういうものに関しては、是非、きちんと調べた上で、それから、出てきたものを、即座に調べていくという、そういうシステムは、是非、やっていただければと思うんですけども。

(司会)

大変、ありがとうございました。

本日いただきました、委員、また、関係行政機関からのご意見につきましては、J R東海に検討をお願いするとともに、今後、この会議でも詳細を検討してまいりたいと思います。

そして、事後調査計画書に反映するなどの意見交換をしてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、現地調査の締めくくりにあたりまして、くらし・環境部長の池谷から、ひと言、ご挨拶申し上げます。

(池谷部長)

それでは、改めまして、本当に、2日間、委員の皆さま、本当にありがとうございました。

また、オブザーバーの方々も、本当にありがとうございました。

また、J R東海さん、今回、始めて、この連絡会議に、保全連絡会議に参加いただいたということで、ある意味では、保全連絡会議、これがスタートということだと思います。

委員の先生からも、いろいろ、今、お話いただきましたけれども、福田先生の方からのお話、情報を適切に出していただくということは、是非、お願いしたいと思ひますし、最後に、和田会長からもお話がございましたけれども、この会議は、決して、監視するとか、あるいは、要望を挙げるという会議ではなくて、やはり、一緒になって、この素晴らしいリニア新幹線という、日本の技術の粋を集めた事業を進めていく

上で、静岡県として、いかに環境の負荷を減らしてやっていくかということ、私どもとしても、先生、有識者の皆さんがいらっしゃいますので、その方々の知見を併せて、より良いものにしていきたいということで考えておりますので、是非、今後も、引き続き、協力の方をお願いをしたいと思います。

具体的には、細かな内容については、また、部会の方で、もう少し、キチッと詰めていただくような形で行っていきたいと思いますけれども、今回は、例えば、自然環境部会の増田先生、部会長はいらっしゃいませんけれども、既に、何回も入ってらっしゃいますし、今回も事前に、もう、入ってらっしゃるということで、おそらく、委員の先生方、全部が、もう、現場をご覧いただいたと思いますので、そうした上で、今後の議論がより現実的なのという大変ですが、実りあるものにしていて、事業を、私どもとしても、円滑に進めていきたい。そして、皆さん、地元の皆さまの懸念も少しでも減らしていくというような形でやっていきたいと思いますので、引き続き、よろしく願いいたします。

2日間、本当にどうもありがとうございました。

(司会)

これもちまして、現地視察を終了いたします。ありがとうございました。